
太陽の子の受難～仮面ライダー×リリカルなのは～

909

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の子の受難〜仮面ライダー×リリカルなのは〜

【Nコード】

N3817N

【作者名】

909

【あらすじ】

仮面ライダーBLACK RXⅡ南光太郎は戦いの最中、突然起こった不思議な事により別世界に召喚される。しかし目覚めると彼は少女の姿へ変身していた。それは彼の持つ能力が発動された結果だった。

しかも目覚めた先の世界は魔法が存在する別の世界だったッ！

第一話「RX!!! リリカルなのはの世界」(前書き)

新作です。最強のライダーのRXが、その時不思議な事が起った、でリリカルなのはの世界に行きます。そこで彼はなのは側の登場人物に成り代わってしまいます。

第一話「RX!!! リリカルなのはの世界」

—我々の知る地球とは別の世界—幾人もの仮面の勇士たちが悪の手から地球を守護する世界。その名を仮面ライダー。

その11人目の存在「仮面ライダーBLACK RX」が地球でクライシス帝国と戦っていた時に起こったある出来事。それは彼の人生で2度目の奇怪な出来事だった。

「クライシス!!! これ以上の悪事は許さん!!!」

RXはクライシス帝国が送り込む怪人の攻撃を退けるべく、戦いを続けていた。—しかし。

「俺はクライシス最強の戦士、怪魔ロボット…」

クライシスの怪人はそれまでの悪の組織とは違い「怪魔戦士」と言う総称があり、4つの部隊からコンスタントに送り込まれるが、今回は怪魔ロボットの様だ。

「くっ! 一体貴様たちには何人最強の戦士がいるんだ!？」

こうも毎回襲ってくる怪人にいちいち「最強」と名乗られてはさすがのRXもうんざりしたようで、げっそりとした声で叫んだ。(かく言う彼も毎回名乗りを上げているのだが)

「うるさい!!! とにかく喰らえ!!!」

敵がバズーカを構えてRXに向けて発射する。

RXは攻撃を避けるべく多段変身形態の一つ「バイオリダー」に

なり、体を液状、もしくはゲル状に変化させる。こうなれば相手の攻撃は一切無効化でき、拘束状態からも脱出できる。そこから反撃に繋げるのが彼の戦闘スタイルであった。

「しまったバイオリダーに……」

そこまで怪魔ロボットが言いかけた瞬間だった。急に辺りをまばゆい閃光が包み込み、2人を包み込んだ。

「うわあああああつ！」

液化したバイオリダーの悲鳴とも取れる叫びが空しく木霊した。ようやく光が晴れた瞬間。そこには先ほどまでいたはずのバイオリダーの姿は無く、怪魔ロボットだけが残されていた。

「むう！どこに行ったライダー……」

赤外線探知や熱探知など、考えられる限りの探知手段を駆使して辺りをくわなく探してみても何の反応も無く、戦場にはクライシス側だけが残される形となった。彼等は血眼になってRXの行方を捜したものの、クライシスの科学力をもってしても一向にRXの行方はつかめなかった。

「RXは一体どこに消えたのだ？」

「分からんが今が好機だ。日本への攻勢を強めようではないか」とある要塞でクライシスの幹部がRXがいなくなったことに伴う攻勢を計画していた。はたして日本はどうなるのか。

「う、うう……こ、ここは？」

見たことのない部屋の景色が広がっている。そして自分はどこかで寝ていたらしい。

すぐに飛び起きて辺りをうろつく。

「おかしい…なにか体に変な感触を覚える…鏡はどこだ？」
自分の姿を確認するべく、置いてあった手鏡に自分の顔を写してみる。すると可愛らしい十代後半程度の少女の顔が映っている。

「何だこの姿は…RX、いや光太郎でもない…しかしこの子、可愛いな」

鏡には後ろで紙を束めている赤紙の美少女が映っていた。しかし良く考えてみると鏡には自分しか映っていないはずだ。ではこの少女は何なのか？

試しに顔の皮を引っ張ってみる。すると鏡の少女も同様の動作をしている。

「いててて…夢じゃない」

一瞬の沈黙ののち、光太郎は鏡に映っている少女が自分の姿である事に気がつき、愕然とした。そして胸のあたりを見ていると、そこには男なら決してあるはずの無いものがあった。

「…こ、これは！ゴルゴム、いやクライシスの仕業か！？」

彼とてこのような事態など体験していない。ましてや「目覚めたら体が女の子になっていた」などと言う漫画や映画、小説などでもめったに見なさそうなシチュレーションに陥ったなどとは思ってもよらない出来事である。

「…状況を整理してみるか。たしかあの時バイオリダイダーになって…液化していたはず。まさか！？」

彼は瞬時に結論を導きだした。バイオリダイダーの液化状態時に光が自身を包み込んだのが最後の記憶である。考えられるのは一つ。「自分が意識を失っているうちに無意識に他人の体とバイオリダイダーの「細胞融合」能力でミクロのレベルで融合してしまったのだと。

そうだとしても前に一回だけ融合した時は融合を任意で解除できたはず。しかし今回は解除される様子はない。

「RXやロボライダーにはなれるのか…？変身！」

試しにRXへの変身動作を行い、ポーズを取ってみる。RXのベルトがあるであろう部位から光が走るが、変身できない。

「…！？どういうことだ…何で変身できない…？」

変身が駄目なら武器はどうだろうか。

「リボルケイン！！」

RX時における必殺の武器「リボルケイン」は生成できるようだ。RXのベルトがあれば左のタイフーンがある部位からリボルケインの取っ手が突き出る。それを引き抜いて構えてみる。

「リボルケインは大丈夫か。他の武器は…」

その後、様々な実験（残り2形態の武器の生成実験、はたまたかつての姿であるBLACKの変身ポーズにまで及んだ）の結果、BLACKやRXへの変身は不可能だが、変身機能そのものは損なわれておらず、武器の生成は可能、体内のキングストーンも健在であることが分かった。

「体が別の姿になっても武器は造れるようだな。しかし…何故こうなってしまったんだ？」

首を傾げるが、これが今、自分を取り巻いている状況らしい。

「女の子として生きろと言うことなのか…俺に…」

意気消沈となる光太郎。そしてこの女の子の名前は何かなのか。鏡で首を見ると首の下あたりに？11と、何かの数字を表す文字が記されている。何の因果だろうか、南光太郎は仮面ライダー11として11人目に当たる存在であり、自分の前に10人の仮面ライダーが存在したことは分かっているので、11と言う数字には何かと縁があるのである。

「11…？じゃこの子の名前は数字か何かかな」

しかし女の子と言う条件に当てはまる単語はなかなか見つからず考えこんでいると不意に後ろから声をかけられた。

「何やってるんだ…ウェンディ」

「うひゃあ！？」

思わず驚いて大声を上げてしまった。振り返ってみるとセミロングの水色の髪をした少女がびっくりした顔をしている。

「もう〜びっくりさせるなよ」

この子、後で聞いたが、名前はセインと言うらしい。この体の元の持ち主の名前はウェンディと言うらしい―から見ると「姉」にあたるらしいので、俺はとりあえずこの子に頼ることにした。

そして信じてもらえるかはわからないが、しばらく話した後、自分の事を話してみた。

最初はさすがに「何言ってるんだ」という反応が返ってきたが、リボルケインやボルティックシューター、バイオブレードなどを見せたり、「トゥワッ!」の掛け声で得意の前方への逆宙返りを披露するとさすがに納得したようで驚きの顔で見ている。

「これで分かってもらえたかな？」

「…納得。でも信じられない。姿はウェンディそのもののに中身が違うと言われても」

「それはそうだろうなあ…」

光太郎はセインに困った顔で言う。セインもこの事を他の姉妹達に言っても信じてもらえるか保証はないと返す。

「ドクターでも信じるかなあ…？何せこんなの前代未聞だよ」

セインが困った顔を見せる。「自分の妹の体が別人の意識に動かせられている」と言うのは承服しがたい事だが、事故でこうなってしまったと言われてはしかたがないように思える。

色んな次元世界が存在する以上、こういうこともありうるかもしれない。

セインは新鮮な気持ちが浮かびあがるのを感じ、でウェンディ（光太郎）の力になってやろう。そう心に誓った。気さくな彼女らしい選択と言える。

これ以後、ウェンディ（光太郎）は何かとセインに相談を持ちかける様になるのだが、それはまた別の話。

そんな事で光太郎は女性の姿で生活を送る羽目になった。解除ができるようになるまでのしなりの間はウェンディと言う女の子として生きるしかないが、他人の体に乗っ取ってしまった罪悪感が彼に重く圧し掛かることになった。

「何考え込んでるのウェンディ」

「クワ姉」

光太郎―いや今はウェンディと呼ぶべきか。は自分の「姉」に当たる「クワットロ」に話しかけられた事に気がつき、振り返る。「なんでこうなったのか分からないけどあなたのIS（先天固有機能のこと）：アテにしているわよ」

クワットロはウェンディの力をどうやら元々確認されていたのは別の技能と判断したようだ。（実際は後天的かつ偶然の産物だが）

「う、うん。ありがとう」

ぎこちなく返す様子にクワットロは首をかしげながら「あなたいつの間にあの口癖治したの?」と言う。

（何? この子、口癖なんてあったのか! ?）「ええと何だっけ?」

「いつも〜スとか言ってたじゃない。…まあいいわ。とにかく今回は援護、お願いね」

「う、うん」

クワットロの言うには「自分達への対抗組織に対して行動を起こす」らしい。女性と戦うのはウェンディ（光太郎）としては避けたいのだが、四の五の言ってはられない。

こうして援護を任せられたウェンディはクワットロの指示に従う形で配置につき、指示を待った。

しばらく待っていると援護の求めが入ったので、現地に赴いてみる―すると。

2人の女性がクワットロを追いかけているのが見えた。

「… および…の現行犯であなを逮捕します!」

「今日は遠慮します」

との会話が聞こえた。

「何とかしないと。ここはあれで！… ボルティックシューター！」

ウェンディは元の姿―RXの多段変身形態の「ロボライダー」の武器

ボルティックシューターを召喚し、照準を合わせて引き金を引く。その瞬間、銃口から一筋の光弾が放たれる。当てるつもりはない。戦闘用改造人間の分厚い装甲に対して使用する武器を生身の人間に向けて撃てば、間違いなく殺してしまうだろう。それだけは避けたかったので敢えて、ボルティックシューターの照準はわざとずらした。（ボルティックシューターの召喚に合わせて、ウェンディの体のスーツの色は変化しており、一部除いてロボライダーと同様の塗装パターンになっている。同時に手はロボライダー同様の追加装甲に包まれている）

「…これで退いてくれればいいんだが」

しかしそう甘くないようで、もう一人の白い防護服を纏った少女が杖を構えてこちらに何か撃とうとしている。

「エクセリオン……バスターああッ！！」

「まずい！！バイオブレード！！」

とつさにボルティックシューターからバイオブレードに持ち替えてそれを盾代わりにして跳躍でエネルギー攻撃の射線上に立ちふさがった。

RXに変身できなくともジャンプ力などは不思議と元の時とさほど変わっていなかったのと同じ高度まで上がるのは容易だった。直撃した瞬間、相手側の少女は勝利を確信しただろう。

しかし次の瞬間、そこには剣で相手の攻撃のエネルギーを吸収したウエンディの姿があった。

「そんなっ！？エクセリオンバスターのエネルギーを…！？」

驚愕する少女を尻目にさらにそのエネルギーを反射させると、リボルケインに武器を変えて構えを取る。それは敵にとっては得体のしれない脅威の出現でしか無かった。黒を基調としたカラーリングの服装は在りし日のRXの姿を彷彿とさせていた。

こうして彼の奇妙な新たな生活の幕が開いた。

元の姿、南光太郎、に戻るかは分からないが、今はこうするしかないのが現状だ。ウエンディは状況を打開すべく動き出す。

第二話「RX、機動六課と交戦す」

RXⅡ南光太郎の新たな戦いが幕を開けた。リボルケインを片手に地面に陣取り、敢然と相手の前に立ちふさがるその姿は風格溢れるものだった。（ただし少女の姿ではあるが）

「これ以上好きにはさせない！」

リボルケインが光り輝く姿は相手側の白い防護服の少女を警戒させる。ウエンディはリボルケインこそ自身の奥の手であることは自覚していたのでいつでも使える様にして相手の出方を見ていた。うかつにリボルケインを使えば相手を爆死させかねないからである。

――対峙している、白い防護服を纏った少女の名は「高町なのは」。次元世界を事実上支配する「時空管理局」の最強の一角を担う俊英である。彼女は今、今までのどの敵とも異なる感覚を覚えていた。武器の構えなどはどう見ても特撮ヒーローのポーズのようだし、何よりも持っている武器に見覚えがあったからである。

「あの武器、どこかで見たような……」

元々、地球人であった彼女にはウエンディの構えなどに地球で有名な存在との共通点が見いだせた。その名は「仮面ライダー」。人知れず「悪」と戦い、数多くの組織を討ち滅ぼしてきたと言われる伝説の存在であり、地球ではそれなりの知名度を持つ。ちょうど彼女の親友の「フェイトⅡTⅡハラオウン」がそれに関する調査を行っているところであったため、知っていたのである。

「まさか……！」

――ここで結論が導き出された。ジェリル・スカリエッティが何ら

かの方法で仮面ライダーに関する情報を手に入れ、それを自身の作品に反映させたとすれば。

「そんなことは絶対に…許さない!!」

なのははさらなる攻撃の態勢に入る。ここで放置すればいずれは次元世界の大きい脅威になりかねない。そうすれば自身の故郷の地球とてどうなるか—と言う思いが彼女を突き動かした。

「スターライトお…」

なのはの魔法の中で最大の威力を持つ砲撃のチャージが開始される。魔力が制限されていない今の状態で放つこの一撃ならば先ほどのように剣で吸収、反射は無理だろう。

まさに乾坤一擲の一撃である。

なのはは一撃必殺の想いを込めて全力の一撃を放った。

「ブレイカーアアアッ!!」

しかしそれだけの大威力の攻撃には当然隙が生じる。ウェンディはそれを見逃さなかった。跳躍で射線軸から逃れるとキングストーンと太陽エネルギーが生み出すパワーを用いて、少女の攻撃から逃げるべく、本来ならベルトがあるであろう部位から凄まじい閃光を放った。

「悪いが今は君と戦う訳にはいかない!ライダー…パワーフラッシュユ!!!」

太陽がその場に出現したかのような凄まじい閃光になのはは両目を手で抑えてのた打ち回る。スターライトブレイカーが発射途中であったはずの彼女の杖「レイジングハート・エクセリオン」もライダ

「パワーフラッシュの閃光で機能を阻害されたのか、完全に沈黙していた。この隙にウェンディはなのはの魔手を逃れ、他のメンバーと合流せんと彼女本来の先天技能を用いてライディングボードで逃走に移った。ウェンディが本来持つ技能がここで発揮された形となるが、中身が仮面ライダーである光太郎なためか速度を利用した巧みな動きで廃墟となった都市を疾駆している。ウェンディの本当の意識が動かしした場合より使いこなせているのかも知れない。しばらく走り、放棄された高速道路まで来たあたりで次なる襲撃を受けた。どうやら先ほどの少女の仲間のようだが：複数でくるようだ。」

「逃がさねえ！ここで捕まえてやる！！」

今度は小学生ほどの外見の幼女がハンマーを振り回して襲ってくる。これにはさすがの光太郎も驚点し、目を白黒させた。

（なんなんだこの世界は！！次から次へと女の子が襲ってくるなんて：俺、何か女の子に悪いことしたかぁ！？）

涙目になりながらも攻撃を受け流す。少女達からハンマーを振り回されるわ、銃で狙われるわ、殴りかかれるわ：ウェンディにとってこの日は厄日であるのかもしれない。

「（こうなったら援護担当の子を上手く気絶させて逃げよう！！）
ポルティックシューター！！」

ポルティックシューターで援護担当だと思われる銃使いの少女の周辺を狙い、放つ。威力過剰に思えたがとっさの判断で撃ったので何とも言えないように思えたがその少女はバリアのような物で防いだようだ。

「とっさに展開してよかったわ：一瞬でも遅れてたら：！」

この行為が他のメンバーの闘争心に火をつけた様で、ほぼ全員に襲

いかかられる。

「こうなったらしかたない、まとめて相手になる！…来いっ！！」

こうなっては彼女も観念したようで、複数を相手にしての戦闘に移った。

「トゥワ！！」

こうなれば一人ずつ確実に戦闘不能に追い込むしかない。格闘戦となればこっちのものだ。ウェンディはRXであった時のような見事な動きを見せ、一步も引かない戦いぶりであった。

「はあああっ！！」

紫色の髪の手を着けている長髪の少女が殴りかかってくる。ローラースケートで加速をつけた拳による単純な打撃攻撃だが、喰らえば結構なダメージが与えられてしまうが、そこは元の世界でさまざまな怪人と戦ってきたウェンディの経験勝ちだった。

拳の一撃をその場から動かずに回避し、わき腹に強烈なボディブローを見舞い、仰け反らせ、怯ませたと同時に首元に手刀を当てて気絶させる。

「ギ、ギン姉っ！！このお…よくもギン姉をつ！！」

「バ、バカ！早まるなスバル！！」

仲間の制止を振り切って、スバルと呼ばれた少女がウェンディに殴りかかる。「姉」と叫んだので、長髪の少女の妹だろうか。

「くっ！！」

ウェンディは拳をギリッと鳴らし、一定のポーズを取ったあと、地面絵を叩いて空高く舞い上がり、赤熱した拳を空中から急降下して

―ウエンディはスバルを捕虜とした。そして彼女らの主「ジェリル・スカリエッティ」はスバルを改造しようとしたが、ウエンディがすんでのところで阻止に成功し、どうにかスバルは正気を保ったままでウエンディの監視のもと、損傷部（キングストーンのパワーを用いたウエンディのキックで内部の機械がいくつか破損してしまったため）の修理を兼ねてスカリエッティが偶然入手したと言う改造設備（ゴムゴムやグライシスとは違う系統とはいえ、高い技術レベルにある事から、おそらくは先代の仮面ライダーである「仮面ライダーZX」が戦っている「バダン」と呼ばれる組織が使用していたものだろうか）でメンテナンスが行われた。

「この設備、どうやって手に入れたんです？」

ウエンディが壁ぎわに立ちながら疑問を口に出す。服装は逃走の際に洋服店から手に入れた白いブルゾン、手には革手袋と言うスタイルである。（これはウエンディの、自分はいくまで南光太郎である、事を忘れないようにする気持ちの表れで、奇しくも地球で普段着ていたのとはほぼ同じデザインである。）

「何らかの理由で異世界から漂着していたのを頂いたのさ。君の製造過程でも役にたっているよ」

スカリエッティは淡々にウエンディの体について説明をした。彼によれば、ウエンディの機械部にはこの設備に残されていた部品が用いられている事、そしてその技術は主に戦闘向きの機体の改修に使われ、能力を以前よりも格段に高めているとの事。動力源はほぼ全員超小型核融合炉のハイブリット機関に強化していると自慢された。

（なるほど… だからジャンプ力が前とそんなに変わっていないように感じたのか。これだけの技術を持った組織はバダンだけ…すると改造人間の技術がこの得体のしれない奴に渡ったと言うことか）

ウエンディは鋭かった。先輩ライダー達が未だ戦っている

と言う組織の持つオーバーテクノロジーがこのマッドサイエンティストの手に渡ったとなれば、何かを起こそうとするのは当然だろう。

「この子に何か変なことをやったら許しませんよ」

と、念のために釘を刺す。もしそうなれば自分が止めるしかないだろう。例えば武器を使ってでも、だ。

「私も科学者のはしくれのつもりだ。安心したまえ」
(それが一番信用できん!!)

と心の中で呟くウェンディ。

修理の方は順調に進み、30分ほどでナノマシンを用いての機械部の修復が終わり、40分後には全て完了した

「これで良し。10分後には目覚めるだろうから面倒を頼む」

「分かりました」

一応返事をするスバルをお姫様抱っこで自分の私室に運ぶ。ベットに寝かし、目覚めるのを待つ。

「…ッ!？」

スバルは目の前に広がっている景色が自分の知るどれとも違う事に気付き、辺りを見廻す。

そして最後の記憶では自分は一人の敵に気絶させられたのを覚えている。そうしてすぐに自分の置かれている状況を理解した。自分は不覚にも敵に捕まってしまったのだと。

「気がついたかい？」

「だ、誰!？」

「俺かい？俺は…」

この後の言葉が出てこない。元の姿であり、おそらく当分戻れないであろう「南光太郎」の名を名乗るのか、それとも仮の器であるこの少女の名前を使うのか。迷ってはいらなかった。光太郎、そしてRXの姿を失ってしまった今となっては後者を使うしかないのが現状である。

「ウエンディ。気絶している君をここまで連れて来た」

と告げると、スバルの体を改造しようとしたスカリエッティを制止し、なんとか部分的な補修と内部の機械の修理だけに留めたと説明した。

「なんでそこまでしてくれたんです？あたしは敵ですよ？」

「君をあのマッドサイエンティストから助けたかったのさ。あの人が弄ったらただじゃすまないからね」

とため息交じりの声でスバルにスカリエッティの物凄い狂いぶりを話す。ウエンディ自身も自身に起こったことを話したとたんに体を散々調べまくられた上に彼の言うところの超一品級の「ロストログア」（この世界の住人の言うところの古代遺産で、キングストーンもその定義に当てはまる）が出現したと聞くと、さっそく調査のために体のいたるところを調べ尽くされたと話して行くうちに落ち込むウエンディに同情したくなるスバルであった。

「大変だったんですね…」

「ああ…。調べが終わった瞬間に一発お見舞いしてやったが、それでも腹の虫が治まらなかった（ある意味、ゴルゴムやクライシスより性質悪いぞ…）。そういえばまだ君の名を聞いてなかったね」

「あたしはスバル・ナカジマって言います」

「スバルちゃんか。これからよろしく」

ウエンディはスバルと握手を交わした。これがスバルの運命を変え、ウエンディ（光太郎）の果てしない戦いに巻き込まれるとはこの時は知る由も無かった。

「ところで、なんで女の子なのに男みたいな話し方なんですか？」

「話すと長くなるんだけど…いいかい？」

ウエンディは自分自身について語りだした。そして自分の本当の名前と姿についても。そして太陽の子として戦ってきた日々など…。

――こちらは機動六課。重要メンバーのスバルを捕虜にされたこと、たった一人の敵にいい様に翻弄された末の敗北に皆、意気消沈していた。特にウエンディと交戦したメンバーは短い戦闘の間でただの一撃もかすりもしなかった事実が心に重く押し掛かっていた。その中でただ一人冷静さを保っていたのは、前線メンバーを集めた上で、あの機人の戦い方が地球の有名な存在に似ていると告げた。

「あの戦闘機人の戦い方は、仮面ライダー、との共通点が多いんだ」

「おいちょっと待て！仮面ライダーって言えば……！」

なのはがヴィータの言葉に頷くと、彼女の親友であり、仮面ライダーの存在を調査していたと言うフェイトも加わって説明に入る。

「地球には10数年前から鉄仮面を被って何かと戦う存在の噂が絶えなかったんだ。地球でのつてを頼って調査をした結果によれば、少なくとも10人以上が確認されてる」

フェイトはホワイトボードに地球で入手したと思われる歴代の仮面ライダー達の写真を張り出す。

「まず、この写真に写っているのが最初に確認された仮面ライダー。地球で接触した「立花藤兵衛」って名乗るおじいさんは、彼は、仮面ライダー1号、と呼ばれていて、地球の技術レベルでは不可能なはずの機械での人体改造を施された人間と言った。とても信じられなかったよ」

他のメンバーも一様に信じられないと言った様子だった。技術的限界からミッドチルダでも実用化は見送られた「サイボーグ」を、技術が劣るはずの地球がミッドチルダが戦闘機人を作り出すのに四苦八苦していた時代に既にサイボーグを実用化していたなど。

「さらに年月を経るにつれて、V3、X、ストロンガーと名乗る後継者と思しき人物も確認されるようになっていったの」

フェイトは中央にその当時の新聞の一面を張り出す。『7人ライダーの活躍によってデルザー軍団は全滅！！神奈川県で決戦が行われた模様』と大きく一面を飾っている。各ライダーのインタビューも載っているようで、栄光の7人ライダーに電撃取材と題されたコーナーが一面の横に書かれている。

「物凄く有名なんですね。ライダーってのは」

ティアナが何と言ったらいのかといった様子で言う。

「そうなんだよね…私のお父さんも昔、Xライダーにサイン貰ったって今でも私に自慢するほどだもの。反応に困るんだよねえ…あれ。」

なのはもその有名さには困らせられた事もあるとため息をつく。

「『仮面ライダーZX』を最後に新たなライダーは出現しなくなって、戦いも無くなったのだと誰もが思っていた」

フェイトは自身の知る範囲で歴代の仮面ライダーの戦いを説明した。その時々組織や技術によって生み出された戦闘用の改造人間の被験体（一部例外あり）となった男たちの記録は、現在となっては半分伝説と化していて、自分達も真偽は分からないと告げた。

「未確認だけど、最近になって新しい仮面ライダーが出現したっていう情報もある。名前は仮面ライダーBLACK RX」
フェイトはここで初めて、現在確認されている中で最も新しい仮面ライダーであるRXについて触れた。

「RXはその名の通りに、仮面ライダーZXが日本を去った後、現れて、日本を守っていた、仮面ライダーBLACKがパワーアップをして生まれた姿。最初は別人だとされていたんだけど声色や態度からBLACKと同一人物と確認されてる」

「そのRXには、昨日私たちが戦った機人と多くの共通点

があるの」

なのはは断片的に確認されているRXの戦闘中の写真を貼りだす。リボルケイン、ロボライダーのボルティックシューター、バイオライダーのバイオブレードが使われている局面での貴重な一枚だ。そしてその隣に

映し出されたのは戦闘でのウェンディの構えを遠くから捉えた映像である。両者を比較してみるとそれがよく分かる。剣さばきや銃の構え方がまったく同じなのだ。

六課の面々はしばし言葉を失った。そして自分達を圧倒できるだけの戦闘力を保持し、さらに仮面ライダーと同じ力を持つ機人。なのはは自分達が小細工したところで勝てるのだろうかと表情を曇らせた。そして管理局の中では最強クラスの实力を持つと自負する自分の攻撃さえ弾き返した程の力に畏怖していた。そして愛弟子とも言えるスバルが拉致られた事に心を痛めていた。そして。

（スバルは……私が助ける！！）

拳を握りしめて決意を新たにしていた。

第二話「RX、機動六課と交戦す」(後書き)

と、言うわけで史実と異なり、スバルが拉致られた訳です。史実での役割を姉妹で逆転させました。

登場人物設定その一（前書き）

この小説はTS物なので、今のところの登場人物の設定を整理します。

登場人物設定その一

登場人物 設定

仮面ライダーBLACK RXⅡ南光太郎

ご存知の歴代最強クラスの仮面ライダーで、クライシスとの戦いが中盤から終盤に差し掛かる頃からの登場。この小説では、バイオリダー、が持つ細胞融合能力（本編のバルンボルン戦で使った能力）で

別人の体に乗っ取る事になってしまう。

ウエンディ

魔法少女リリカルなのは第3期のStrikersにて、敵勢力の一員として登場する少女。

赤い髪を後頭部でまとめた少年的な容姿で、外見年齢は14、5。リリカルなのはにおける、兵器、的な体を持つ、戦闘機人、。体を意識レベルで南光太郎が乗っ取ってしまった為に南光太郎のリリカルなのは世界における、器 となってしまう。そのため、ゴルゴム、の世紀王の証であるキングストーンが体内に宿った。今のところはBLACKおよびRXの各形態の能力を発揮できるが、あくまで光太郎個人の能力であり、彼女自身の能力ではない。

高町なのは

魔法少女リリカルなのはの主人公。年齢は第3期当時の19歳。地球人の中では類まれな魔法の才能を持ち、エースオブエースとまで謳われた。ただし過去の出来事により、体の後遺症を負っており、全力を長時間発揮することは不可能になっている。それが彼女の心

に深い傷を残している。

第三話「運命の戦士」(前書き)

ほぼ一年ぶりの更新です。

第三話「運命の戦士」

一仮面ライダー。その武勇は機動六課にも轟いたわけであるが、南光太郎は別人の体で生活を送る事にいささか罪悪感を覚えたが、緊急事態の都合上半ば諦めていた。しかし疑問が浮かび上がる。それは……

「こういう場合って元の体にあった魂はどうなるんだろう？」

光太郎「いや、今はウェンディというべきかーはある一つの疑問が頭にあった。それはこうして別人の体に乗っ取ってしまった以上、『その肉体が元の本来持つべき魂と人格はどうなったのか』は当然ながら気になるところである。この世界に來た時に初めての戦いの時になし崩し的に連れてきたスバルに聞いてみる。ウェンディの、事情、を知っているのは今はスバルのみ。スカリエッティを逆手に取る形で二人は内偵を行っていた。

「うーん。聞いたことはあまりないんですけど地球のSFとかだと、Aって人の魂がBさんに乗り移った。外見はBさんそのものだけど中身はAさん、みたいにソフトウェアを上書きする要領で魂が上書きされるか、心臓移植のように互いの特徴が現れていく、みたいなパターンは聞きます。だけど今のところは判断できませんね」

「するとこの姿のまま変身できちゃう線も考えられるわけか……難しいな」

ウェンディはある意味では重大な問題に頭を悩ます事になった事のため息をつく。この姿になってからというものの、精神が男性そのものであるので風呂やトイレなどでついつい男だった時の癖が出てしまう。それは元は20歳（外見は改造時の19歳のままだが）の日

本男子であった彼女の泣きたくなる点であった。

「今日はどうします？」

「取り敢えず、敵情視察、と行くよ。一応ある程度は戦うことになりそうだから」

「気をつけてくださいよ」

「ああ」

ウェンディはこっそり元の世界からキングストーンフラッシュで次元に道を作って呼び寄せておいたかつての愛車達の内、最も一般的なバイクに近い、ロードセクター、で街に繰り出した。このマシンはゴルゴムとの戦いが終わって間もない頃に設計者の大門洋一博士の遺族（息子）の明に返却したが、緊急の時には使ってくれ、との達しがあったので再び使用の機会を得た。キングストーンのおかげかは不明だが、呼び出しに応じたという。

20分ほど飛ばして市街地に着くと、そこには地球の都市と変りない風景が広がっていた。中にはどう見ても地球から伝わったとは思えないものも多数見受けられるので、自分と同じような目にあってやってきた人々が文化を伝えたのだろうと目星をつけた。

一しかし時空管理局という組織について聞いたが、学生時代に習った、三権分立、って奴が不完全だ。まるで昔の国家みたいだ。あれじゃ独裁って言われても仕方がない。

スバルから時空管理局の事を聞かされた時、ウェンディは時空管理局をこう評した。軍隊・警察・裁判所を一つの役所で済まそうというのはある意味では権力者の私兵に成り下がりがねない危険性を持つ。地球は有史以来、数多の戦争で血を流してきたので三権分立は

徹底されている。管理局は旧体制崩壊後に建てなおされた国家の機構ではあるというが、いささか地球人の目から見れば前時代的に思えてしまう。

—そんなウエンディは不運にも廃棄都市区間に差し掛かったところで、またしても時空管理局の追跡を受けてしまう。

「…やはり来たかつ、噂の……」

上空を見ると戦闘服姿の二人の女性が空中から追跡してくる。スバルから聞いている、機動六課、のメンバーだろう。図らずしもメンバーの一人を拉致してしまった自分は彼女らに取って不倶戴天の敵だ。追跡に血眼になるのもわかる。

「止まりなさい!!」

こういう時のお約束だが、止まれと言って止まる奴はいない。ロードセクターのスピードを上げ、最高速で振り切ろうとする。ロードセクターの最高速は960?。亜音速の世界だ。このバイクに追いつけるのは歴代仮面ライダー達のマシンでも数は少ない。せいぜい仮面ライダースーパー1とスカイライダーのマシン位のものだ。普通はこれで振り切れるのだが……

「何!?!」

ウエンディは驚愕した。最高速に達したロードセクターに追従できるとは思っても無かったからだ。

「アクロバッターよりも速いロードセクターについてこれるとは…

…空戦魔導師というのは恐ろしいな」

そう言っている間にも空中からの攻撃が始まる。追跡中の2人の内、ピンク色の髪の騎士のようないで立ちの服装の女性の方がなにやら弓矢を構えている。とっさに光太郎は逃げるのをやめ、受け止める事を選択した。何かかしのエネルギーだとすれば、それを食らうことでキングストーンが再び活性化し、かつての姿の内のどれかを取り戻せるやも知れぬからだ。

「翔けよ、隼!!」

エネルギーを纏った矢が放たれ、ウエンディに命中し、大爆発を起こす。撃った主である「シグナム」はいささかやり過ぎであったと反省するが、侮れぬ敵だと聞いている以上。致し方無い。しかし自身を最大の攻撃を食らったのだ。ただで済むはずはない。そう思っていたが。

爆発と煙が晴れると、そこには衣服が幾分破れただけのウエンディの姿があった。

「……そんなっ!? シグナムのシュツルムファルケンを食らってダメージを食らってない……?」

追跡者の内、金髪でツインテールの方の女性―フェイト・テストアロツサ・ハラオウン―が目を開いて衝撃を受けた声でいう。自分たちの中でも強力な部位に入る攻撃を受けてほぼ無傷というのは考えられないからだ。ウエンディはそんな彼女たちの驚きをよそにさなる行動に入る。それはRXへ新生したはずの彼にとってほぼ奇跡とも言える出来事であった。

拳を組み、ギリギリと鳴らし、ある一定のポーズを取る。一爆発の瞬間のキングストーンの導きに従って。それは、彼、の原点とも言える姿への布石であった。そしてウェンディー南光太郎ーは叫んだ。

「変……身ッ!!」

それはシグナムの放ったシュツルムファルケンの膨大なエネルギーが、ウェンディの体内に宿り、他人へ、乗り移った、がためにほぼ休眠状態であった太陽のキングストーンを活性化させてしまった事を意味していた。光太郎にとってこの姿へなるのは久しぶりである。RXへ変身可能となったはずの今ではいささか非力にも思えるが、RXになった今なら、あの姿でも限りなくRXに近い戦闘力を出せるはずだ。ベルトが出現し、眩い光が発しられる。

ーそれは南光太郎の魂が徐々にウェンディの体に馴染み始めた事を示していた。光太郎は別人の姿を借りての変身に複雑な思いを抱きつつもキングストーンの導きのままに変身を行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3817n/>

太陽の子の受難～仮面ライダー×リリカルなのは～

2011年11月12日09時08分発行